

大川だより

第2号(平成23年9月1日発行)

発行：大川活用プロジェクト

(事務局 守山市湖岸振興検討会)

大川プロジェクトに寄せて～アジアの村々とのつながりから自覚する新しい可能性～

京都大学生存基盤科学研究ユニット

・東南アジア研究所 安藤和雄

世界が発展することは、経済が発展することであると強く信じられています。日本はまさにその優等生として振舞ってきました。

都市への人口集中と工業、サービス業の過剰なまでの発展は、農村が発展の歪を一手に引き受けてきた結果でもあります。気がついてみれば、農業や農村文化に関する一方的な軽視の風潮がボディブローのように、農村で生活していくことの誇りや力を奪い取ってきたのです。

こうした風潮は、経済のグローバル化、近代化によって、アジアの国々、特に開発途上国にも広がりつつあります。アジアの村々が日本の農村が辿ってきた道を辿ってほしくないという思いで、自治会の皆さんが主催、共催されている釣りなどで子供たちが川に親しむ事業や大川周辺の植物観察会に、ミャンマー、ラオス、ブータンからの農業普及、農業地理を専門にしている大学関係者に参加してもらいました。

日本の農村は、今やと戦後一貫してとられてきた経済中心、インフラ中心の地域発展方式に、農村に住む人々が自ら疑問を感じ、地元の文化や自然に親しむことで、地域の活性を原点からもう一度つくっていかうとされています。

これまでの代償が大きかったには違いあり

ませんが、それ以上に私は地元の人たちが、主体的な取組によって生きる誇りや力を再生させようとしていることに喜びを感じています。

そういう人たちと出会うと私自身も元気になるれます。

農村に生きる人たちが自分たちの心を豊かにしていく地域発展のアプローチがあることを、いち早く、アジアの開発途上国の人々に知ってもらいたいのです。決して大げさな表現ではなく、大川プロジェクトで美崎自治会が取り組んでおられる事業は、アジアの開発途上国の農村発展の新たな可能性を具体的に示しているのです。

皆さん、是非、アジアの村々に目を向けてください。そして、大川プロジェクト、美崎町を、アジア、世界とのつながりという羅針盤に置いてみてください。



野洲でんくうの会中村先生から説明を聞く外国人参加者の方々(7月23日)

メンバーコラム第2回「夏の太陽にも負けない笑顔でした」

(守山市みらい政策課 木村)

6月26日、7月3日の両日、地域の方々のべ100人による水草除去作業が実施され、ヒシを中心に約12トンが水面から取り除かれました。▼私が参加した3日は早朝から照りつける太陽の下、26日の経験をふまえて自分たちで工夫した道具を携えた約60人が集結。その勢いにのみ込まれ、気がつけば私も胴長靴で大川にドボン！▼左右に分かれた2人の間に渡したロープにつけた「鉄の櫛」は歩くごとに水底から水草を刈り集め、また、胸まで水に浸かって作業をする方、慣れた手つきで「田船」を操り、刈り取った水草を集める方等、誰一人途中で投げ出すこともなく、約3時間にわたって作業が進みました。▼水は濁っているものの、川の中から眺める景色は思いのほか美しく、驚いて飛び立つサギの姿や水辺の風景は心を和ませてくれるものでした。また、40センチ以上の大きなコイが捕まるハプニングも。▼終了後、泥だらけになって疲れきったはずの皆さんの顔には楽しそうな笑顔が。その目の中に達成感とともに、大川への「誇り」を感じたのは私の思い込みのせい？

「大川の歴史」

～歴史を見つめて、将来を考えてみませんか～

現在は、澱んだ水と水草が繁茂する大川ですが、そんな大川にも歴史があります。

今回はその歴史を少し紹介させていただきます。

「大川ハ野洲川ノ支流ニシテ本大字東部水保境界ナル野洲川堤塘(ていとう)ヲ穿チ水ヲ引クニ石樋ヲ以ラス其水西北ニ注ギ田野ヲ灌溉シツツ湖ニ入ル其延長拾七町三十間(約 1.9 km) 幅員上流ニ於テハ弍間(3.6m) 下流ニ至ルニ從ヒ廣リ約五間(約 9 m)」と、大正 2 年(1913 年)刊の「稿本 速野村郷土史」に描かれています。そこからは過去から大川を地域の農業に活用してきた姿、更には人の手によって切り開かれた大川の姿が浮かび上がってきます。

野洲川の扇状地に位置する美崎地区では、肥沃な土地に目をつけた岐阜や名古屋、八日市からの入植者によって、大正時代には桑畑としての開墾が行われていたようです。

美崎が現在のような畑作地域のなったのは戦後のこと。その間も大川は地域の農業用水として、また、生活のための漁「おかずとり」や子ども達の遊び場として、地域との関わりの深い川であったことでしょう。先日、お話をお伺いした女性からも「私が嫁いできた昭和 40 年ころは、洗濯や風呂の水を大川から汲んでいたものですよ」と教えて頂きました。澄んだ流れを持ち、生活に密着した川であった当時の姿が想像されます。



昭和 40 年 9 月 洪水で孤立した人々の救助
に向かう自衛隊員 (守山市誌より転載)

一方で旧野洲川の支流であった大川では、水害の歴史が何度も繰り返されてきました。

昭和 40 年 9 月、台風 24 号による川の氾濫では、中洲に孤立した今浜新田の人々を救出しようとした自衛隊災害派遣隊隊長が殉職される悲しい出来事も。旧大川橋跡のほとりにこのことを記録する頌徳碑(しょうとくひ)が今も立っています。

その後、水害を防止する目的で野洲川放水路の整備が進められました。昭和 54 年には放水路への暫定通水が開始。しばらくして大川は現在のような上流からの水の流れのほとんどない、澱んだ河川に変化していきました。そのような移り変わりの中、水害による地域の被害はなくなりましたが、一方で「大川と地域」、「大川と生活」との関係性は薄れていったのでしょうか。

昭和の終わりごろには、すでに水草の繁茂が進んでいたようで、実験的に外来種である「草魚(ソウギョ)」が大川に放流されました。この魚は大量の水草を餌にすることから、一時的には水草が減少する効果もあったのですが、草魚が「日本の環境では繁殖ができない」こと、また、新たな放流については「在来種への影響が危惧されることから、外来種の導入には慎重な判断が必要であること」等から、現在は生息しておらず、また新たな放流は安易にするべきではないと考えられます。

「大川をもう一度、地域の中に取り戻そう」、「大川 환경을良くしよう」とする活動が地域の皆さんを中心として動き始めました。

今年からは水草除去や環境調査の活動が、守山市役所とともに京都大学や立命館守山高校等とも連携する中、「大川活用プロジェクト」として開始されています。

大川の「将来像」をどのように描くか、検討は始まったばかりです。今後、地域の皆さんとしっかりした意見交換をする中、もう一度、皆さんに親しまれる「大川」の復活に取り組んでいきたいと思えます。(守山市環境政策課 筈井)